

14 明治9年6月10日 菊池長閑

第六号六月十日認む

第二三号去月十二日達し弥無事可在勉学一段之義大喜ニ候当方
同然ニ候三人写之写真達候義ハ第五号ニ申入候通ニ候家内之写
真其宿之者之見立方随分可笑打寄評し候松の実糰二月中ニ東京
へ着之積にて通運会社へ頼差出候処漸ニ去月小細丁迄達し然に
賃を懸て送程之品ニも無之且又時節柄腐敗を氣遣藤村一条にて
相開くと申来残念ながら不得止候英君信方君も御安着信方君に
ハ直ニ貴様と御同宿之由随分氣を付厚く御世話可申上先達も申
入候通波岡氏之内話ニハ橋場様ニ而ハ専ら御力ニ思召候趣ニ候
へは御同居御聞上御安心可被思召候且又貴様一人寄留おハ於我
等も安心ニ候御両君へ宜御機嫌伺上可申新庄様エも早速申上候
五位様三戸お七戸瑞庵寺へ御参詣夫お八戸お三閉伊へ御廻り去
月廿日御安着也在々御宿を争ひ又競ふて献上物等真ニ限在候て
君上之心地御機嫌伺ニ御旅宿へ出る者ニハ一々御逢御酒肴料銘

々へ被下置右等之為夜十二時過ニ御寢床ニ被為入候事間々有之由御慕申上事可歎美也今度聖上奥羽御巡幸七月三日当地ニ御着輦ニ付夫迄御滞留天機御伺被遊度御願昨今御聞届之電報有之よし昨日御屋敷ニ而伺候 成姫様ハ御機嫌御伺ニ去月十三日御発駕御登京早姫様兼而元三春候エ御縁組ニ付御同発也華頂様終去月廿三日泉下之客と被為成候若君様漸御口実ハ余リ御丈夫ニも不被為入哉ニ候郁姫様乍恐御痛敷候

御祖母様当年七十七年ニ被為成世の中ニ而ハ七喜之祝として祝候由何等之訳か突留りたる説も不承候得共考るに七十七を組合すれハ花如斯花之字姿ニなる故花之字を書せ候且又是迄御兄第衆も至極御壯健可羨ニ付世談之例ニ習去月七日祝上候其大略左に

- 一 南部糸織 一反 長閑長閑武夫武夫
- 一 杖 一本
- 一 納戸裏木綿 一反 お多代お多代おいそおいそ
- 一 貫木綿 同 おくのおくのおなみおなみおよしおよしおすみおすみ

右御家御揃ノ処ニテ長閑持出し
御祖母様へ差上引統て

- 一 中形木綿 一反 オミ輪様オミ輪様お千七様お千七様
- 一 瀬戸引盃 三十 本宿 享本宿 享彬郎嫡子彬郎嫡子
- 一 扇子 二 藤田重丸藤田重丸
- 一 鼻紙・煙草 彬郎妻初メ彬郎妻初メ
- 一 茶わん ふう敷 楊子ふう敷 楊子童子共分童子共分
- 一 足袋 手拭 煙子手拭 煙子横田家内横田家内
- 一 扇子 羽根楊枝羽根楊枝ともよりともより
- 一 線 扇子 山本縁より山本縁より

右披露前同断此外七日ニ菓子等御致来なれとも不記
哥 何れも短冊也

七十ちをすきこし年の数にあひて
千代の七草つみそへにけり
長閑

是へ国中ハ七艸を摘て添へ上る
七十にまた七年を重ねきて
米田 勝英

八千代をいはふけふの寿
七十にあまる四人のはらからの
星川 正甫

瞳ミたとふる今日そ嬉し花
来客
服部祖母様年八十 米田武兵様年七十九

川村祖母様同七十五 星川正甫様同七十二

藤田姉様 横田姉様
山本 縁 野田英蔵兄第三

藤田おとめ 横田おかめ
松田おろく精一妻也

此外松橋長沢エも申遣候へ共故障ニ而不来

右何れも他人不交也御祖母様も御兄第順々御着座御老人方えハ座布団を差上而吸物出し三献畢而御祖母様出座一同之御酌此節

(注記)
本宿ハ御到来之引盃模様ハ菊ノ折枝之喜ノ字尤喜ノ字ノ未画よ御写真御直筆の喜之字を御引被成候春來心懸たるかひありて重之客一人も故障なし好晴なれハ障子を開四方山を詠緩ニ祝上なり御老人かた座布団御用之様子座敷之見はへニも成大ニ都合よく人々ニ被羨大慶いたし候御直筆の花之字御差越候長寿を祝候間常ニ□

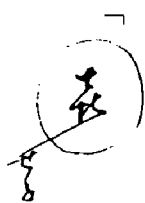
中可致居候当月洋行之生徒有之趣河上ノ態々報告有之都合ニ寄
野引半紙水晶ボタン等頼事も可有之手配向一條治士ニ委任致置
候おすみ作文懸御目度と申事ニ候間差越申候

聖上之行在処多分菊池金吾之宅ニ可成と之事尤実ハ本人ノ御願
欵と聞得候肴丁之宅を買入門前エ直ニ路次を付候手配ニ懸リ居
候

武夫殿

長閑

(注記)



如斯也是ハ本宿之心付也」

(同封1 菊池スミ)

鶯児ノ声

梅花正ニ開トキ朝枕上ニテ枝上ノ鶯児ノ声ヲ聞ク時ハ実ニ人意
快適シ又近山ニ登リ桜花ナドヲ見物シ或ハ宴ヲ催スルハ甚ダ愉
快ナリ

曇雨ノ釣ハ

曇雨ノ釣ハ必ズ小児ノ愛スル者ナレ共終日はヲ愛スベカラズ学
文ヲ怠リテ魚ヲ釣ル事ヲノミ好メバ壮年ノ後悔ル者ナリ然レド
モ漁人ハ魚ヲ取リテ是ヲ売リ以テ飯食ノ料トナス事ヲ得ルナリ

右奉入尊讓也

御兄様

(同封2 菊池喜世筆)



きせ女

(封筒表)

「垂□利加国ポストン府

ホートウイン。ストリート

二十二番地

菊池 武 夫 殿

報平安

(封筒裏)

「大日本陸中国岩手県下

盛岡第一大区五小区加賀野

八十六番地

菊池 長 閑

菊池スミ

十一年七ヶ月